

## 『ルイの戴冠』におけるルイの人物像

小栗栖 等 (和歌山大学)

『ルイの戴冠』は、カペ朝を擁護する政治的意図のもとに書かれた、王権世襲のイデオロギーを強化するためのプロパガンダである。J. Frappier のこうした見解は、歴史家たちに受け入れられ、一般向けの書物でも紹介されている。

「王権と特権階級の関係、それもとりわけ、王がひ弱で、取り巻きが悪く、無能もしくは不公正の場合。我々が目にするのは封建制度の危機の反映であるが、家臣の忠誠、王冠の世襲制承認という方向で、ギヨームはこれに決着をつける。すなわち、彼に対する国王ルイの不当な仕打ちにも拘らず、ギヨームは依然として忠臣でありつづけ、ひたすら王君への義務から、国王の敵と休みなく戦うのだ。」(J. Flori、新倉俊一訳、『中世フランスの騎士』, p. 114 ク・セ・ジュ文庫)

『ルイの戴冠』の粗筋を追えば、それが忠臣ギヨームの奮闘の物語であることは疑うまでもない。第一挿話では、ギヨームは王権をだまし取ろうとしたエルネイスを退けて、ルイの頭上に王冠を戴かせる。第二挿話では、フランス王の名の下にローマを異教徒の手から救う。第三挿話では、反乱の知らせに急遽帰国し、リシャル親子の王位篡奪計画を崩壊せしめる。第四挿話では、ギ・ダルマーニュを倒して、ローマ侵攻を頓挫せしめる。最終挿話では、ルイの治世を嫌った諸侯たちが覇権を争って、内戦状態が到来する。ギヨームは国内を平定し、ルイを自分の妹と結婚させる。

また、『ルイの戴冠』が王位の世襲制を強調していることも間違いない。王位を篡奪しようとしたリシャルの息子を処罰する際、ギヨームは言う。

「この盗人の裏切り者め、神様ご自身がお前に罰をくだされますように。何故、正当な君主の顔に泥を塗ろうとしたのだ。お前の父親のリシャルが王冠を戴いたことなどなかったというのに」(CourLouisLe, vv. 1893-1895)

王の息子が王の跡継ぎとなるということは、見かけほどには自明のことではない。9世紀末から10世紀には、カール大帝の末裔はパリ伯ウードの子孫と交互に王に選ばれていたし、カペ朝成立後も、歴代の国王たちは、長らく、生前に後継者の戴冠を済ませてしまうことで王の世襲制を補強していたのである。したがって、王権世襲は、カペ朝にとって、維持すべき、そして、発展させるべき、重要な政治概念であった。その意味で、上のギヨームの台詞がカペ朝の政治的プロパガンダたりえたのは間違いない。だが、「王がひ弱で、取り巻きの悪く、無能もしくは不公正」という記述を見ると、誰しものが、一つの疑問を感じるのではないだろうか。無能な王を描くことは、本当にカペ朝の利益になるだろうかということである。フラピエはこれに次のように答える。

「『戴冠』は一つの極端で、パラドクサルなケースを提示しているのである。というのも、ルイはもっとも悲惨な君主として描かれており、ルイ王の人間像は王権の理念から、ほぼ完全に乖離してしまっているからである。『戴冠』の作者はルイではなく、フランス国王を称揚しているのである」(Frappier 1964, p. 149)

しかし、そもそも、具体的な国王が国王の名に値しないのであれば、忠義や王権の世襲制を擁護する動機が失われてしまうのではないだろうか。この疑問こそが本発表の出発点である。